

オケイシーの1幕劇と後期戯曲

—概要と解題—

河野 賢司 (KONO Kenji)

はじめに

本稿では、アイルランドの劇作家ショーン・オケイシー(Sean O'Casey, 1880-1964)の1幕劇全9編と後期戯曲の代表作3編の紹介に努めたい。使用したテキストはマクミラン社の『オケイシー戯曲集』全4巻(*Collected Plays, 1949-51*)およびこの全集に漏れた1幕劇2編(第1章で扱う③と④)を収録する同社の『1幕劇5編』(*Five One-Act Plays, 1962*)である。

1. オケイシーの1幕劇全9編の概要と解題

① 『キャスリーンは聴き入る』(*Kathleen Listens In, 1923*)

オケイシーのアビー劇場デビュー作『狙撃兵の影』(1923年4月12日初演)と代表作『ジュノーと孔雀』(1924年3月3日初演)のちょうど中間の1923年10月1日に初演された政治的空想劇。オー・フリーハン家の一人娘キャスリーンをめぐる、様々な政治的立場の人物が面会と支援や愛顧を求めてやってくる。まずは国民党の2人組ジョニーとジョウイ、職人ジミー、この家に下宿し、アイルランド語教育の重要性を訴えるキルトスカートの老人、さらには4人の求愛者(自由国支持者、共和国支持者、実業家、農場主)が現れるが、キャスリーンは体調を悪化させ、医師は絶対安静が必要と説く。最後にはオレンジマン(北アイルランドのプロテスタント)までが繰り出して、政治的混乱に拍車をかける。アイルランドの伝統的な象徴とされる「キャスリーン・ニ・フリーハン」が、ひたすら様々な世論の「傾聴」に没頭して、自ら意思表示できない優柔不断さを揮っている。キャスリーンが住む家は、教会風の窓があるものの、暴動で多くは破損している設定も、当時の教会が置かれた状況を暗示している。

② 『ナニーの夜遊び』(*Nannie's Night Out, 1924*)

表題に採られたアイリッシュ・ナニー¹は、酒乱による暴行罪で度々刑務所に収監されてきた30歳の女性。労災で寝たきりの父親を2年間介護して看取り、やはり既に他界した母親を慕う歌を路上で賑やかに歌う。一方、戯曲の舞台となる食料品雑貨店を営むプロテスタントの寡婦ペンダー夫人(Mrs. Pender)は、用心棒代わりにジョニー爺さんを二階に間借りさせ、彼は夫人をしきりに口説いている。彼以外に、近眼のジミー爺さん、背中が曲がったジョウ爺さんも花束を抱えて来店し、夫人との再婚を望んでいる。この老いぼれ恋敵3人衆が、若さ自慢が高じて屈伸運動の柔軟性比べに挑んでいると、銃を持つ若者が侵入し、売上金を強奪しようとする。老人3人が無様に怯え、夫人だけが気丈に抵抗する中、ナニーが入ってきて、酔っ払った勢いで若者からむので、強盗は発砲もせずに退散する。夫人はナニーに感謝するが、突然ナニーは心臓発作を起こして倒れる。流しのバラッド歌手が、即興で臨終の祈祷を彼女に捧げる。救急隊員が駆けつけた時、すでにナニーは絶命しており、彼女の12歳の息子ロバートやこの歌手は霊安所まで同行しようとするが、老人の一人がナニーを侮辱する言葉を洩らし、バラッド歌手は激昂する。愛想を尽かした夫人は生涯独身を貫く決意を宣言し、老人たちはすすり泣きで引き下がる。

実入りの少ない商店を切り盛りするペンダー夫人は、商品の人形を若い娘に持ち逃げされたり、強盗に押し入られたり、魅力に乏しい老人3人から言い寄られたり、苦勞が絶えない。しかし、住む家もないナニーや子ども11人を養わねばならないバラッド歌手に比べれば、まだ経済的に恵まれている。ジョニー爺さんが発した差別発言は、ナニーたち底辺の人々への同情心に欠ける冷酷なもので、互いに団結すべき弱者の間にも深い溝や分断があることを明るみに出す。「喜劇」と銘打たれているが、アイリッシュ・ナニーの描かれ方は、とうてい喜劇と言えない苦い後味を残す。

③ 『始まりの終わり』(The End of the Beginning, 1937)

ベリル家の夫婦ダリー(Darry Berrill)とリズィ(Lizzie)の口論が発端になって、男女の労働分担を交換する試みが行われる。食器洗いや掃除の家事及び家畜の餌やりを夫ダリーが、草刈り機を使って牧場で草刈りを妻リズィがすることに取り決める。家事など造作ないと高を括っていたダリーは、訪ねてきた友人バリー・デリル(Barry Derrill)と共に、レコードに合わせた柔軟体操やマンドリン演奏や歌唱を優先して、約束した家事を後回しにする。時間が経過し、慌てて取りかかった家事で鼻血を出したり、電球交換に失敗してヒューズが飛んで停電を引き起こしたり、ドラム缶から石油漏れを起こしたり、庭で放牧中の牝牛をつないだロープに引っ張られて煙突内部に引き込まれたり、ドタバタ劇が展開する。それでも妻に対するダリーの理不尽な罵倒は止まず、今日舞台上演があれば、身勝手な責任転嫁に終始するこのパワハラ亭主に非難轟々、ブーイングの嵐が吹き荒れること必至である。グラマラスな隣人女性にもてようと柔軟体操に励む邪念は、②『ナニーの夜遊び』の3老人の魂胆と同工異曲である。「喜劇」の看板に恥じない圧巻のスラップスティック劇であり、表題は、家事交換を「始め」たものの、男の無能ゆえに挫折に「終わる」ことの謂いだらう。

¹ ナニーはアナやアンの愛称だが、「子守女」「おばあちゃん」も意味する。Monica Weir, *A Trip Down Memory Lane* の邦訳(櫻間まゆみ訳)『アイルランドのナニー 思い出をたどる旅へ』(Amazon, 2017年)は後者の意。

④ 『1ポンドの預金引き出し』(A Pound on Demand, 1939)

ある民間委託郵便局に預金1ポンドの引き出しに訪れた労働者の2人組ジェリーとサミー。サミーはかなり泥酔状態で、そもそも字が書けないほど無教育な様子で、ジェリーが率先して女性局員と手続きの交渉をする。局内には、ビルマ(現ミャンマー)への国際郵便を特定の日時までには届けたい中年女性客がいて、2人ともめごともしきる。他人名義の通帳を使つての預金詐取の疑惑が濃厚で、女性局員は警察署に電話をして、大柄な警官が監視に立ち入る。通帳の署名と引き出し請求用紙へのサミーの署名が一致しないことから、2人組の請求はあえなく却下され、通帳も局内保管後、預金者住所宛てに郵送する措置が採られる。不当な取扱いを受けたと郵政当局に直訴すると2人組は脅すが、無駄骨に終わり、彼らは立ち去る。実直で遵法精神に則った局員の対応が模範的で、「寸劇」^{スケッチ}と銘打たれた佳品である。

⑤ 『診療会館』(Hall of Healing, 1951)

冬の月曜午前10時前、ダブリン教区貧困者診療所の待合室。担当医師、薬剤師、管理人・通称アレルーヤ(Alleluia)の3人が勤務する診療会館に、80歳の老女、肺病の若い女性、ワイン依存症のジェントリー(Jentree)や、マフラーの色で呼び分けられる男3人(栄養失調の黒マフラー、一人娘の往診を懇願する赤マフラー、初診で要領がつかめない緑マフラー)も外来患者として訪れる。いつも日曜に痛飲する医者は、二日酔いで体調が悪く、怒りっぽい。アレルーヤは短気な医師を怒らせまいとして、患者たちが並ぶ位置をチョークで指定して円滑な進行に努める。診療費や薬代は無償だが、薬を入れる容器として空き瓶3本を患者自らが持参する慣わしがあると設定で、初診で事情に疎い緑マフラーはパブで空き瓶3本を調達して戻ってくるが、いざ受診すると、瓶など不要だと薬剤師に罵倒される。診察開始前から待ち受けていた赤マフラーは、診察終了まで待たされた挙句、娘のための再度の往診を拒絶され、彼の妻が娘の死を知らせに来る。同様に、母親の緊急往診を依頼に来た少年の依頼票も、診療所内に放置され、明日以降に回される。

本来、診療を必要としない患者(背中が曲がった老婆、アル中の男、栄養失調の男など)の来院が過密な診療状態を招いている面もあるが、二日酔いで出勤する医者や、杓子定規に規則を遵守する管理人に職務倫理上の問題がないわけではない。しかし、医療の人的・物的資源が絶対的に不足し、日常的にトリアージを迫られる状況で、医療従事者の怠慢や硬直を非難しても解決につながらないのも事実だろう。赤マフラーが訴えるように、気休めの言葉をかけてその場しのぎの思いやりを示すことが必要な場合もあれば、医者の不用意な安請け合いでかえって患者の怨みを買う場合もあるだろう。「医は仁術」とよく言われるが、仁徳にあふれる対応とは、どのようなことを指すのか、考えさせられる。「本生真面目な²笑劇」と銘打っているが、結末が示すように、とうてい笑劇とは言い難い。

² 原語は'sincierious'で、'sincere'(誠実な)と'serious'(深刻・真剣な)の合成語。拙訳は「本気な」と「生真面目な」を合成した造語。

⑥ 『夜伽話』 (*Bedtime Story*, 1951)

オケイシーには珍しい艶笑劇で、副題に「アナートル流の風刺劇」と添えられている。独身男性専用のアパートに住むジョン・ジョウ・マリガン(*John Jo Mulligan*)はアンジェラ・ナイティンゲイル(*Angela Nightingale*)という女性を密かに自室に招き入れ、一夜を過ごした³。同宿の友人ダニエル・ハリバット(*Daniel Halibut*)が夜遊びから帰宅する前に、彼女を退去させたいマリガンだが、アンジェラは口紅やハンドバッグが見当たらないと言い張り、そのまま二度寝しかねない様子。どちらが先に誘惑したかについても、両者の言い分は対立する。やがてハリバットが帰宅し、マリガンはなんとか取り繕って、いったんアンジェラを連れて出て行くが、現金を入れたハンドバッグなしでは帰れないとアンジェラが言い張るために、探しに戻ってくる。やむを得ず、マリガンは財布の現金や小切手を一時金として手渡し、彼女をようやくアパートから送り出す。物音に気づいた大家ミス・モスイ(*Miss Mossie*)がマリガンの部屋をハリバットと検分し、(探し物の後の)異様な乱雑さに驚愕し、かつてミス・モスイ自身が悩まされた夢遊病状態にマリガンがあるのではと疑う。警官を呼ぶまでマリガンへの対応を任されたハリバットは、カーテン吊り棒を隠し持って、マリガンをなだめる態度をとるが、マリガンは凶器に気づき、友人も夢遊病者でないかと恐れて、自分もワイン瓶を身構えて彼と対峙し、勢い余ってガラス窓を瓶で破損してしまう。やがて、ミス・モスイが警官と看護婦を引き連れて戻り、マリガンは夢遊病者と誤解され連行される運びとなる。

行きずりの男女の情事の成り行きは、当初、互いに食い違ふ痴話喧嘩に見えるが、次第に女性の側に黒い魂胆がもともと潜んでいたことが浮き彫りになる。やがて夢遊病の既往歴がある大家ミス・モスイの誤解から、間借人2人も互いに凶悪な夢遊病者でないかと疑心暗鬼が伝染する展開が秀抜である。夢遊病を題材に扱うウィルキー・コリンズ(*Wilkie Collins*, 1824-89)の『月長石』(*The Moonstone*, 1868)が英国最初の探偵小説と目されているが、オケイシーは誤認された夢遊病の題材を自らの戯曲に巧みに取り込むことに成功している。

⑦ 『お暇する時』 (*Time To Go*, 1951)

「道徳喜劇」と銘打たれた作品。アイルランドの田舎町で居酒屋を営むマイケル・フラゴンスン(*Michael Flagonson*)と雑貨屋主人のブル・ファレル(*Bull Farrell*)は、過ぎた縁日の儲け具合を互いにおだて合う一方、若者たちが村から流出して過疎化が進んでいることや、カトリック教会の様々な慈善団体が献金をせびりにくことを嘆き、教会の横暴に断固立ち上がるべきだと、ファレルはフラゴンスンに力説する。そこへ若い男女のサイクリストが付近の廃墟の僧院遺跡を見学したいと道案内を乞い、フラゴンスンはひとまず自店での休憩と軽食を勧める。しかし、まもなく若いカップルは「ぼったくり」(*Daylight robbery*)に会ったと憤って店を出てくる。小土地所有者のバーニー(*Barney*)が、地元の司祭がファレルから内密に受け取った多額の献金に感

³ マリガンがアンジェラに対して「法王庁の避妊法」(荻野式)の周期確認をとっていない場合——1935～80年のアイルランドでは避妊具・避妊薬の販売が原則禁止されていたので——望まない妊娠が起きて、両者が窮地に陥る危険がある。その責任がマリガンにのみあるのは、ガブリエル・ブレア(村井理子訳)『射精責任』(太田出版、2023年)に詳しい。

激して、その善行を盛んに褒めていると、知らせる。教会を罵倒する裏で、教会にすり寄っていた事実を暴露された怒りから、フェレルは、肥料を買いに来た彼に、つけの清算を済まさない限りは売らないと、拒否する。続いて、大規模農場主コンロイ(Conroy)と中規模農場主カズンズ(Cousins)が現れ、コンロイはカズンズが飼育する牛を安く買い叩こうとし、カズンズはやむなく屈服する。一方、寡婦マクリー⁴(Widda Machree)とマナノー島出身のケリー(Kelly from the Isle of Mananaun)は、互いに相手を探し歩いている。過日、両者の間で牛の売買が成立したが、マクリーは自分が不当な高値で売りつけ、ケリーは自分が不当な安値で買い叩いた良心の呵責から、清算を果たそうと考えている。マクリーの言動が社会秩序を混乱させると判断した警部補は、マクリー逮捕の指示を巡査部長に下すが、巡査部長は精神に混乱をきたして現れ、言動がまったく要領を得ない。やがてケリーとマクリーは念願の再会を果たし、2人は抱擁する。逮捕令状と精神鑑定書(責任能力を認定するもの)をかざして、警官2人がこの2人を逮捕する。しかし、その後、両者は手錠をすり抜けて逃走し、警官たちは再び追跡する。この逃走時に、枯れ木に突如花が咲き実がつく⁵が、居酒屋で金勘定が始まると、たちまち元の枯れ木に戻る。バーニーは、目撃した超自然現象は、聖なる幻想にすぎないと呟く。

仕入れに利益を上乗せして転売するのが商いの大原則だが、それが度を超す⁶と、必ず来世で報いがある⁷、と寡婦マクリーやケリーは訴え、できるだけ薄利の良心的売買を提唱している。他者への自発的慈善を実践する勧めは、アブラハム・マズロウ(Abraham Maslow, 1908-73)が説く「5段階欲求」に付け加えられた最終第6段階「自己超越」の境地といえる。本来、こうした内発的慈善を涵養すべきカトリック教会が、執拗に献金を要請して人々から金銭を吸い上げ、金儲けを優先する悪しき風潮を助長していることが痛烈に批判されている。また、指1本で人の動作を停止させ、手錠を開錠するなどの不思議な力がケリーに備わっており、『コケッコ好男』(Cock-A-Doodle Dandy, 1949)でも描かれた、神秘的な雰囲気魔術的リアリズムの技法がこの作品でも援用されている。

⑧ 『夜の銅像』(Figuro in the Night, 1961)

冗長な副題がついた2場の作品。場面転換はなく、短い作品であるので、1幕(2場)劇とみなす。かなり高齢の男女が登場し、若い頃の恋愛を回顧する。どうやらこの2人はかつて恋仲にあったものの、それぞれの親に説得されて結婚には至らなかった

4 アイルランド語で「わが心(my heart)を意味し、親愛の情を意味する言葉。「わが(心臓の)鼓動(my pulse)を意味するアイルランド語「モ・クシュラ」は、映画『ミリオンダラー・ベイビー』(Million Dollar Baby, 2004)のキー・ワードとして使われる。

5 本作は、サミュエル・ベケットの『ゴドーを待ちながら』(初演1953年)の前年の初演であることは特筆に値する。ベケット劇では、第1幕の枯れ木に、一夜明けた第2幕で葉が茂る変化が生じるが、これほどの瞬間的急変ではない。映画なら容易にCG処理できても、舞台では演出上の創意工夫が求められる。

6 菅田将暉が転売屋・吉井良助を演じた『Cloud クラウド』(2024)では、販売不振の健康器具や偽ブランド靴、アニメ・フィギュアを廉価で仕入れて法外な高値で売り捌く。しかし、仕入れ値以下で売却する羽目に陥ることもあり、需給均衡が決め手になっている。

7 ブータン映画『お坊さまと鉄砲』(2024)——英語題 *The Monk and the Gun* の韻に近づけ『住職に銃』でもよい——では、旧式ライフル銃の買い取りに訪れたアメリカ人収集家ロンの提示価格7万5千ドルを「高すぎる」と固辞し、半額以下(3万5千ドル)で妥協する謙虚な老人が登場する。その後、この老人はラマ僧に乞われると、その銃を「供え物」として無償で提供する。マクリーやケリーの精神が奇しくもここに体现されている。

ようだ。カラスの鳴き声の三唱をめぐるやりとりは、荒唐無稽な不条理劇でもあり、哲学の存在論でもある。話題はアダムとイヴの樂園追放に移り、老人はアダムたちの性的墮落を批判するが、老女は人間の自由意思とその選択を尊重する。擾乱の気配がするダブリンをめざして、両者はそれぞれ別の夜道を進み始める（第1場）。2人の老人マーフィーとタイナン、ある若者、盲人と聾者のペアが登場する。ダブリンのオコンネル通りに、「小便小僧」の銅像が突如設置され、それを見物に多くの女性が詰めかけ、警備の警官隊と衝突する事件が起きているらしい。この事件の最中に、若い男女が炎になって消えたかと思うとフクロウに変身して大地を突き抜ける超常現象が起きた、と老人たちは警告するが、この老人たちが混乱に乗じて女性に痴漢行為を働くのを目撃したと、若者は非難する。若者は、恋の歌を歌う娘の家に入り、両者は晴れやかな衣装に着替えてダンスを踊る（第2場）。

第1場の老カップルは、『門扉の中で』（*Within the Gates*, 1934）のギルバート司教とその元・恋人の再会場面を想起させる。本作の2人は互いに貞潔を生涯貫き、司教とその恋人は婚外子ジャニスをもうける違いはあるが、若き日の恋人と数十年ぶりに邂逅する感慨や人生の機微は共通している。「小便小僧」の銅像の小さなペニス見物に女性が殺到する筋立ては、カトリック教会による性の抑圧の諷刺であり、旧弊な価値観にとられる老人たちに代わって、若い世代が自由な社会を築くことへの期待が込められている。

⑨ 『カイルナモウに月が輝く』（*The Moon Shines on Kyleneamoe*, 1961）

アイルランドの架空の田舎町の深夜の鉄道駅。早朝1便と深夜にたまに1便が停車する駅に列車が停車し、駅に勤務する赤帽の若者ショーン・トマシーン(Sean Tomasheen)が車掌マイケルから輸送荷物を受け取る。この時、かつてないことに、一人のイングランド人と思しき乗客が下車する。この不審な乗客に赤帽や車掌は少し敬遠気味に対応し、双方の対話が噛み合わない。さらに鉄道構内で若い男女がデートをしている現場を見つけ、ショーンは厳しく注意する。その間、列車の機関士が何度か警笛を鳴らし、その騒音に安眠を妨げられた70歳の鉄道員コーニー(Corny)と妻マーサ(Martha)が抗議に訪れる。件の乗客は、自分は外務省職員のレズリースン卿(Lord Leslieson)と名乗り、目下当地で休暇中のイングランド首相⁸に重要な速達便を届ける任務を帯びていると説明していると、一向に戻らぬ車掌に業を煮やして、機関士アンディが呼びに来る。相談の結果、コーニーのロバ荷車でレズリースン卿を目的地まで送ることをショーンが提案するが、熟睡中のロバを気遣ってコーニーはこれを拒絶する。長い停車に怒った他の乗客たちを代表して、ある女性乗客が抗議に現れる。ショーンは機関士や車掌に即時出発を促すが、赤信号で出発できない、と機関士は指摘する（実は列車入構時に、ショーンが手動で赤信号に切り替えたままなのを失念していた）。慌ててショーンは緑信号に戻し、列車は無事に出発する。ホームに残され、野宿を決めこむレズリースン卿を案じて、ショーンはカンテラを残して立ち去る。駅近傍に暮らすコーニーは自宅に泊まるようにレズリースン卿に声をかけ、明朝ロバ荷車で目的地まで送ることを申し出る——無償ではなく、ロバ運送の相場料金を支払う条件で。レ

⁸ 原文は 'the Prime Minister of England' (p.384)で、「英国首相」 'the Prime Minister of the UK'と表現していないのは、将来的な連合王国の解体を予見したのだろうか。

ズリースン卿はいたく感謝し、マーサに誘^{いざな}われて暖かな家に入る。

アイルランドの片田舎を訪れるイングランド人と地元アイルランド人が引き起こす騒動は、『紫塵』(*Purple Dust*, 1943)でも扱われ、横柄なイングランド人2人がまんまと撃退される。この小編でも、前半で、植民地支配の歴史に由来する、イングランド人への根強い国民的反感が表明されている。しかし、劇作家オケイシーが亡くなる3年前(1961年)、81歳の遺作であることから、その反感は劇の最後には、人情味あふれるおもてなしで解消されている。無理に民族間の友好を取り繕う必要はないが、「敵であれ味方であれ、困っている者同士は助け合うべき」という趣旨のコーニーの台詞は国際平和を考えるうえで示唆に富む。妻マーサが夫の言葉を鸚鵡返しに繰り返す習慣は、フェミニズムの観点から、主体性の欠如と批判されるだろうが、夫唱婦随の老夫婦の穏やかな晩年を象徴している。

以上、見てきたように、オケイシーの1幕劇は、内容が副題で示された7篇に限っても、「喜劇」(②③)、「道徳喜劇」(⑦)、「本生真面目な笑劇」(⑤)、「政治的空想劇」(①)、「風刺劇」(⑥)、「寸劇」^{スケッチ}(④)と多彩な領域に及んでいる(⑤のように、内実が不一致な場合があるにせよ)。元来、アイルランド作家には短編小説や1幕劇の名手が多く、実はオケイシーも優れた1幕劇の書き手であることは、もっと知られてよい。

2. オケイシーの後期戯曲3編の概要と解題

①『オークの葉とラベンダー』(*Oak Leaves and Lavender*, 1947)

『オークの葉とラベンダー——あるいは壁紙の戦界^{もかい}』は、第2次世界大戦初期の「ブリテンの戦い」(1940年7月10日～10月31日¹⁰)における、イングランド南東部コーンウォールの荘園領主ハザリー大佐の館を舞台に展開する。当主ハザリー大佐は既に前線に出征し、令閨であるデйм・ハザリー(Dame Hatherleigh)には、一人息子エドガー(Edgar)、急遽新たに採用したアイルランド人執事フィーリム・オモリガン(Feelim O'Morrigan)、長年仕えている家政婦ウォチット夫人(Mrs. Watchit)がいる。ドイツ軍の空爆が続く戦時非常事態のもと、この大邸宅は「銃後の守り」の拠点として機能し、国防市民軍兵士(高齢者や徴兵不適格な者、徴兵待機者)や婦人農耕部隊(農作業従事者)の宿舎にも利用され、空襲で焼け出された周辺住民の避難所としての臨時使用も迫られる。プロットは、2人の青年(ハザリーの息子エドガーと執事フィーリムの息子ドリショーク[Drishogue])がイギリス空軍の士官候補生から正規の爆撃機操縦士に任用され、敵機と相撃ちになって撃墜死を遂げる顛末を、それぞれの恋愛(エドガーは農耕部隊のジェニー[Jennie]、ドリショークも農耕部隊のモニカ[Monica]と交際している)や、親の立場からの思い入れを織り込んで、進展する。

オケイシーは既に、第1次世界戦争を題材とする戯曲『銀杯』(*The Silver Tassie*,

⁹ オケイシーの反戦劇『銀杯』を1928年に却下した際、イェイツは、第1次世界大戦が前面に出すぎており、戦争のテーマは登場人物の背後にある「壁紙」にまで薄めるべきだと主張した。オケイシーはこの提言を受け入れず、本作でも戦争のテーマは強く押し出され、背景的な「壁紙」に留まっていなかった。Doris daRin, *Sean O'Casey* (New York: Frederick Ungar, 1976), p.166. また、worldでなく worldとあえて綴り字と発音を歪めて、「戦争」(war)が蔓延する「世界」(world)を暗示している。

¹⁰ クリブルゲイトの聖ジャイルズ教会への空襲についての言及があり、時期を8月24日の夜以降に絞り込むこともできる。

1927) を書いており、サッカーの名選手で人気者だった主人公ハリー・ヒーガンが戦地で負傷し、帰国後、車椅子生活を余儀なくされ、恋人や親友を失う悲劇を描き、特に第2幕は陰惨な戦場場面を舞台で再現した。『オークの葉とラベンダー』が扱う「ブリテンの戦い」は本土決戦とはいえ、制空権を巡る上空の戦いであり、操縦士2人と、炎上する機体からエドガーの救出を試みて焼死したジェニーの死は、伝聞で語られるだけで、舞台では演じられない。

空軍パイロットの悲劇的殉死が描かれているとはいえ、この作品が愛国的プロパガンダ演劇であると断じることはできない。なぜなら、オケイシーは、ドリショークの口を借りて、イングランドのために戦うのではなく、人民のために戦う、と自らの志願の目的を、狭隘な愛国主義から切り離された、社会主義的理想の追求であると表明しているからである。そして社会主義に傾倒するドリショークと対極的な立場にある人物として、かつて夫と共にソ連で働き、夫は現在収容所に送られ、イギリスに政治亡命したディード・タティング夫人(Mrs. Deeda Tutting)を配し、両者に激烈に政治論争させることで、イデオロギーの平衡を保っている。さらには、妊娠中の妻をアメリカに疎開させることを要望する裕福なコンスタント(Mr. Constant)、被災してホームレスとなった難民たち、良心的兵役拒否者ポブジョイ(Pobjoy)をも配して、階級対立の問題や信仰の問題にも踏み込み、単なるプロパガンダ演劇でもなければ、単なる反戦劇でもない奥行きを見せている。ドリショークとモニカが秘密裏に登記所で結婚手続きを済ませ、モニカが彼の子どもを身籠っていることを打ち明けることで、累々たる死を乗り越えて新たな生命が誕生する希望の曙光を輝かせる。ハザリー夫人は悲痛な自己抑制で夫の訃報を隠し通し、息子の棺が墓地に運ばれるのを、まもなく軍需工場に接收される屋敷の窓から見送る。この戯曲の序幕と終幕の最後には、18世紀にこの屋敷に暮らしていた上流階級の人々の亡霊が男女3組のペアでメヌエットを踊る趣向がとられ、現実と異界の幽玄な接触が描かれている。

表題『オークの葉とラベンダー』の意味合いは必ずしも明瞭でない。先に言及されるラベンダーは、「その香りが漂うと死が訪れる」という不吉な迷信と結びつけられる。ハザリー夫人やモニカたちがその迷信を信じており、フィーリムは初耳だったようであるから、コーンウォール地方に特有の迷信なのかもしれない。劇の冒頭と終末に流れるラベンダー売りの歌には、もちろん、こうした弔事からむ不吉な歌詞はない。

一方、オーク¹¹に関しては、恋愛にびくびくするのは「若いオークの木が夏の微風の中で震えるようなもの」と比喻で初めて言及された後、ラジオから流れる愛国的な歌唱の中で「オークの芯が我らの船／オークの芯が我らの兵」と、オーク材の強固さが強調されている。一方で、息子の戦死を観念したフィーリムは「オークの心は長持ちしない」と強固さを否定し、むしろ「鋼の心」を持って、と呼びかける。そして、終幕近くで、ハザリー夫人が「かぐわしいラベンダーは優しい紫の若芽を起こし、^{あまた}数多の丈夫なオークは死にかけたドングリから膨れ」と両者を併記して新たな再生を語り、亡霊である第3の紳士ダンサーも「ラベンダーはまた花が咲き、オークの葉は嵐の風に笑いかけると賛同する。この言及だけを見れば、オークに特定される必要はなく、他の樹木

11 'oak'は「樅」と訳されがちだが、「英語の「オーク」は日本の「檜」なのだ...最初に誰かが「樅」と誤訳し、それが長らく定着し、辞書でも踏襲されてきた」が、「いつ、誰が、なぜ「樅」という訳語をあてたのかは、不明である」という。(鳥飼玖美子『歴史をかえた誤訳』、新潮文庫、2004年、p. 159.)

でも当てはまるように思われる。オークもラベンダーも植物の新生、生命の継承を象徴する一方で、ラベンダーについては死の到来の予兆の性格を付与した表題だと言える。

宗派については、アイルランド人のフィーリムはカトリック教徒だが、デイルム・ハリリーがやや不明瞭である。イギリス上流階級の身分でもあり、英国国教会に属すると推測されるが、一方でお守りとしてカトリック的な天使像をわざわざ息子のために取り寄せる融通無碍な面もあれば、「英国人ユダヤ人子孫説」を強く信奉している点は、ユダヤ教への狂信的な思い入れも感じられる。

②『ネッド神父の太鼓』(The Drums of Father Ned, 1959)

『ネッド神父の太鼓——アイルランドの縮図¹²⁾』は、当初1958年のダブリン演劇祭で上演を予定していたが、ダブリン大司教ジョン・マッケイドが異議を唱えたためにプログラムから消え、初演をアメリカで迎えた日くつきの問題作である。「前轟音」(Prerumple)と称された序幕において、アイルランド独立戦争の1920-21年頃、ブラック・アンド・タンズの捕虜となったビニングトン(Binnington)とマギリガン(McGilligan)の不倶戴天の間柄が、激烈にかつ諧謔的に導入される。同一年で宗派も教育も住居も共通でありながら、2人が犬猿の仲である理由は、英愛条約締結をめぐる賛成派(コリンズ派)と反対派(デ・ヴァレラ派)という政治的立場の相違に基づくもので、内戦を招くほど国論を二分した対立が、個人のレベルで体现されていると推測される。ところが、それから30余年が経過し、本編に入ると、ビニングトンはドゥーナヴェイル町(Town of Doonavale)の町長、マギリガンは助役(副町長)の職にあり——話をさらに錯綜させるのは、それぞれの妻同士(エレナ[Elena]とミーダ[Meeda])が姉妹¹³⁾であることがト書きによってのみ明かされる——互いの嫌悪や反発は依然として続いているものの、実利が関与すると「仕事は仕事」と割り切って、協働関係を維持し、共産国家ソ連からの木材密輸入^{トスダール}を双方合意の上で進めている。

町の若者たちはアイルランド語で「集い」(Tosthal)と呼ばれる文化祭の準備に余念がなく、ビニングトンの息子マイケルやマギリガンの娘ノラは出し物の時代劇——「1798年の反乱」を扱う劇——の稽古に市長や助役の自宅を許可なく使い、劇中劇が演じられる。音楽教師マリー(Mr. Murray)は文化祭で歌う合唱曲の指導を始めるが、彼を教会で雇用するフィリフォウグ神父(Rev. D. Fillifogue)は賛美歌に執着し、自ら指導を始めるが、町民の歌声は彼を満足させない。マリーと神父が口論中に一同はこっそりその場を抜け出す。神父の持つ雨傘の引っ張り合いの喧嘩の末、神父は怒って出て行く(第1幕)。助役マギリガン宅では、町中を飾るプランター入りの花々の準備に忙しい。メイドのパーナデットは恋人トムと作業に励み、若い男女の自由な恋愛を推奨するネッド神父の言葉を話題にする。ネッド神父を探してフィリフォウグ神父が駆け

¹²⁾ 原文は敢えて unnecessary k を挿んだ 'Mickrocosm'。アイルランド人の代名詞たる Mick を響かせ、「<ミック> ロコズム」の駄洒落を意識したのかもしれない。

¹³⁾ ビニングトン、マギリガンがそれぞれ相手の妹と結婚した場合、2人の女性は「姉妹」ではなく、「義理の姉妹」の間柄、そしてビニングトンとマギリガンは「義理の兄弟」の関係になる。オケイシーは「義理の姉妹」も含む、広義の曖昧な使い方をした可能性は高い。一方、もし2人の女性が実の「姉妹」であるとなれば、ビニングトンでもマギリガンでもない、第三者の姉妹とそれぞれが結婚したことになるが、この第三者への言及はなく、蓋然性は低い。

込むが、ここにもいないと知って落胆する。一方、北アイルランドの実業家スケリガン(Skerighan)も助役宅を訪ねてくる。彼は木材を運搬した船舶が、文化祭行事による労働者不足で港湾に留め置きになっている事態に苦情を言う。神父退去後、バーナデットが文化祭のダンスを披露すると、スケリガンは欲情して彼女に抱きつきキスをする。バーナデットは卒倒して心臓発作の仮病を装い、動転したスケリガンが謝罪のために食卓に置いた現金をつかんで走り去る。スケリガンは、舞い戻った神父に、ネッド神父を目撃したと、妄想まがいの支離滅裂な記憶を語る。マリーが訪れ、文化祭でのモーツァルト公演が決まった、と喜ぶ。スケリガンが自らピアノを弾いて「リリバレロ」(Lilliburelo)を歌うと、プロテスタント曲を演奏するのは不見識だとマギリガンは怒る。夫人は鷹揚に構え、スケリガンに歌詞の意味を尋ねるが、実は彼にも皆目分らない。文化祭の旗に描かれた堅琴は南北アイルランド双方の象徴だと、夫人は和解を呼びかける。自宅での夕食に誘いにピニングトン市長夫妻が訪問し、マギリガン助役夫妻と公式なお辞儀を交わそうとするが、不慣れでうまくいかない。マクガンティがバーナデットを相手にお辞儀のお手本を示し、マクガンティが「リリバレロ」を弾いて両夫妻は退室する(第2幕)。

市長夫妻宅での夕食会に助役夫妻とともに招かれたスケリガンは、南北の融和は大いに結構だが、産業が盛んな北アイルランドの優越は揺るがず、南の共和国の発展の遅れはカトリック信仰に起因する、と挑発する。市長や助役は猛反発し、ヘンリー8世の宗教改革に遡って英国国教会を批判する。この論争に市長の息子マイケルが、宗派の枠どころかキリスト教の概念を超える宗教理念を展開する。密輸船舶の噂を聞きつけたフィリフォウグ神父が市長たちに詰め寄っていると、若者たちも押しかける。神父は共産国から密輸した材木を焼却処分するように命じるが、その木材は町民の住宅建設の貴重な資材だ、とマイケルやノラは反対する。帰郷した2人は、都会で大学生活を送って愛を深め、婚前交渉も終えたと明かして、両親の度肝を抜く。それどころか、マイケルはこの町の次期市長に立候補して、旧態依然たるカトリックの抑圧から脱して、自由で民主的で澁澁とした社会の創造を目指している。「^{トスガール}集い」の夜の集会に町民が繰り出す中、ネッド神父の叩く太鼓の音が響く。

表題の「ネッド神父」はついで舞台には現れない。主役不在の手法は、既に『司教のかがり火』(*The Bishop's Bonfire*, 1955)で実践されたが、登場人物たちが生き生きと語るネッド神父のエピソードやフィリフォウグ神父の懸命の追跡をたえず攪乱する神出鬼没ぶりは、マラーキー司教の存在感をはるかに凌駕している。司教が教会権力墨守者であるのに対し、ネッド神父はオケイシーが理想とする改革推進者であるからに他ならない。

③『緑のカーテンの陰で』(*Behind the Green Curtains*, 1961)

第1場「震える門扉」は、プロテスタント教会の敷地。聖人や葬送曲のお喋りを交わすカトリック女性リズィとアンジェラは2人ともアルコール依存症で、一緒に飲みに出かける。カトリックのバズーン(Basawn)とプロテスタントのベオマン(Beoman)は、涙を流す奇跡の聖母像をめぐる頃珍漢なやりとりを繰り広げる。俳優バニー(Bunny)、ゴシップ記者マクギーリッシュ(McGeelish)、劇作家マクギーラ(McGeera)、詩人ホローン(Horawn)たち文化人が教会の通用門にたむろする。遅れて上院議員チャタストレ

イ(Chatastray)が駆けつけても、彼らは教会に入ることを躊躇する。庇護者で文豪の恩人ライオネル・ロバーツ(Lionel Robartes)の葬儀に参列すると皆で取り決めたが、カトリック教徒がプロテスタントの儀式に加わると破門の恐れがあるためである。折衷案や慎重論が大勢を占める中、遅れてきたリーナ(Reena)——レジオ・マリエ¹⁴(the Legion of Mary)の会員——は独り悠然と教会に入る。だが、教会機関誌に携わるカトリック教徒のコーナヴォーン(Kornavaun)が大司教による禁止命令を一同に伝え、文化人たちは立ち去る。リズィとアンジェラが酩酊して舞い戻り、大の字に寝そべる。

第2場はチャタストレイの自宅居間。メイドのノニーン(Noneen)に案内された一同は、互いの悪口を言いながら主人の到着を待ち、マクギーリッシュが引出しから勝手にヌード写真——のちに、フランス印象派の名画の絵葉書と判明する——を取り出して騒ぎ立てる。やがて主人が現れ、ノニーンがコーナヴォーンの来訪を告げるので、客人たちを別室に避難させ、対応をメイドに任せる。コーナヴォーンは主人との面会——その目的は反共声明書への署名や、反共デモ行進への参加、反共論説の寄稿依頼——をしつこく要求し、ノニーンにセクハラの言動をとるので、彼女はグラスの水を浴びせ、彼は捨て台詞を吐いて退去する。次にベオマン——チャタストレイが経営する工場の監督技師——が訪れ、従業員がストを計画中だと伝える。次にリーナが来訪する。作家志望だった彼女は、葬儀出席のせいでレジオ・マリエ幹事を解任され、今は看護婦として働いているが、教会への献身は揺るがず、反共デモ行進で文化人一同が身につけるバラ飾りを持参し、チャタストレイには代表者用の飾り帯も手渡す。続いて、工場の女工3人とコーナヴォーンが押しかける。女工たちは、宗派が異なる男性機械工と女性現場主任の結婚(混信婚)を阻止しなければストを決行すると迫る。法律上、婚姻の自由が保障されている、とチャタストレイが拒否すると、女工たちは憤然と立ち去る。その際、メイドのノニーンが玄関先に乗りつけた自動車で拉致され、覆面2人組が押し入る。ベオマンは果敢に彼らに対峙するが、文士たちは誰も応援しない。ベオマンはリーナとともに警察に通報しに駆け出す。第3の覆面男が入り、3人組はチャタストレイも連れ去る。

第3場「行進する人々の日」は、前場と同じ居間。暴行され負傷したチャタストレイのもとにリーナが訪ねて来て、ノニーンは一晚、寝間着姿のまま路上に放置される私刑を受けたショックで信仰が揺らいでいること、入院中の彼の手当てをしたのは看護婦の自分だったことを知らせる。彼女は緑のカーテン、そして窓を開ける。文士たちが来訪し、司教と懇談してたく感銘を受け、今後は著述に道徳的自主規制を図る、と語る。次にノニーンとベオマンが現れ、一緒にイングランドに移住しようとチャタストレイを誘う。コーナヴォーンがデモ行進用の上着をチャタストレイに着せようとするが、リーナが激しくそれを妨害する。コーナヴォーンたちは諦めて、デモ行進に向かい、ノニーンとベオマンも別れを告げる。しかし、リーナが窓から外のデモ行進を眺めている間に、唐突に心変わりしたチャタストレイは、飾り帯をつかんで家を抜け出し、

¹⁴ 「マリアの軍隊」を意味し、古代ローマ帝国の軍隊をモデルに組織された、カトリック信者の団体で、教会当局から正式に公認されている。最初の入会式は1921年9月7日(聖母マリア誕生の祝日の前日)午後8時にダブリンのフランシス街ミラ・ハウスで行われた。「レジオは女子の組織として誕生し、8年過ぎてはじめて男子プレジディウムが作られた」が、会員資格に男女の制限はない。——『レジオ・マリエ提要』(大阪市:コンチウム・レジオニス・マリエ、1968年[改訂再版])、p.57。

デモ行進に加わる。彼に気づいて戻ってきたベオマンは、傷心のリーナと一緒に来るように勧め、彼女に愛の告白をし、彼女は受け入れる。

オケイシー最後のフルレンクスの戯曲は、やはりカトリック信仰の問題が扱われている。宗派が異なれば、恩人の葬儀・告別式にも出席できず（第1場）、混信婚に強硬に反対してストライキも辞さない保守性や、35歳の独身男と若いメイドが同居することに威嚇的暴行を加える狭量さ（第2場）が描かれている。染みついたカトリックの伝統的価値観から抜け出せなかったチャタストレイと、カトリックに敢然と反旗を翻したリーナの行動力の対比は鮮やかである。一旦は絶望に突き落とされたリーナが突然、ベオマンの告白を受け入れるのは急展開すぎるが、筋道の通った毅然たるベオマンの人柄に惹かれたらうことは第2場最後の共同行動（警察への通報）から察することができる。しばしば言及される「緑のカーテン」は、アイルランド社会やアイルランド人の心の窓を外界から隠蔽・遮断する幕として使われている。

*

以上、第2章ではオケイシーの後期戯曲3編を概観した。英国に移住したオケイシーが「ブリテンの戦い」を克服した英国民を鼓舞する趣のある『オークの葉とラベンダー』を第2次世界大戦後に書くことで英国世論に迎合したとする批判もあるが、ドリショークには社会主義擁護の言葉を語らせ、良心的兵役拒否者ポブジョイにも断固たる暴力拒絶の姿勢を貫かせているように、オケイシーはまったく政治的に変節していない。『ネッド神父の太鼓』では、まさにこの作品の上演が拒まれたダブリンの文化祭行事を題材に、カトリックの旧弊な体質を打破する試みに乗り出す若い世代を情熱的に描いている。『緑のカーテンの陰で』は、他の宗派儀式への参列を頑なに拒むカトリックの不寛容な教義や共産主義の台頭に対峙するカトリック教会の強硬姿勢、貞節に疑念のある信徒を拉致して虐待する陰湿な私刑が、アイルランドを象徴する緑のカーテンに隠され、人目に触れない内部に巣喰っていることを暴露している。共産主義者でプロテスタントのベオマンが、カトリックのレジオ・マリエ会員のリーナを抱きかかえて、緑のカーテンの部屋から出て行くラストシーンは、オケイシーとアイリーンの夫妻関係も彷彿とさせる。

おわりに

1幕劇9編を含む12編の戯曲を網羅的に紹介したために、原文引用や詳細な注釈が欠落したことに、忸怩たる思いが残る。それでも、この拙い作品紹介がきっかけとなって、「ダブリン3部作」以外のオケイシー戯曲への関心が高まることを祈念する。